

Ⅱ-② 通常学級での発達支援・UDの視点を取り入れた学習指導の発信

概要

- 1 研究テーマ及び研究理論の中に取り入れ重要性を明記する。
- 2 学習指導案及び授業討議の視点に加える。
- 3 研究発表会で発信する。
 - (1) 特別支援教育支援員の研修として位置づける(綾川町教育委員会とのコラボ研修)。
 - (2) 特別支援の分科会を設ける
 - (3) 授業の指導者を一人は教科の指導者、もう一人は特別支援の指導者にする
- 4 日常の研究授業・討議及びワークショップで発信する。公立校のニーズを知る。
 - (1) 討議会の中で
 - (2) 坂井校長の360° カメラを用いたワークショップの事例紹介
- 5 研究日より、ホームページ、フェイスブックで発信する。公立校のニーズを知る。

1 研究テーマ及び研究理論の中に取り入れ重要性を明記する。

互いに磨き合い、学び続ける子供の育成（2年次）
—一個の発達に応じ、メタ認知を促す授業づくり—

（3）メタ認知の前提となる支援

昨年度の実践より、メタ認知を促す働きかけを行う前提として、個の気質に応じた支援を行ってきた。その中には、ユニバーサルデザインの考えを生かした支援や、個別の支援が見られた。昨年度に実践された主な支援について以下に示す。

＜ユニバーサルデザインの考えを生かした支援＞

効果	支援方法
活動の様子や、方法を分かりやすくする	・ 文字だけで示すのではなく、イラストを使いながら、視覚的に場面や方法を示す ・ ICT機器を活用し、映像で事象を比較させる
自分の成長を捉えやすくする	・ 自分の伸びをグラフ化する
比較対象を分かりやすくする	・ 比較対象を色分けして示す
活動の見通しをもてるようにする	・ 本時の流れなどを板書・掲示する ・ タイマーを拡大表示したり、活動終了の1分前に声をかけたりする
視覚的に捉えにくいものを視覚化する	・ 音を図形を使って表したり、話したことをICT機器を使って記録したりする ・ 気持ちの大きさなどを、枠の大きさで示す
活動の切り替えをしやすくする	・ この眼鏡をかけたら〇〇の活動というように、ポイントとなる活動の合図となるようなものを用意する

＜個別の支援＞

対象	支援方法
文字で記述することが難しい子供	・ 子供が話した言葉を、教師や友達が書きとめる
自分の思いをすぐに記述できない子供	・ 記述する前に教師が尋ね、思いを語らせた後に記述させる ・ 友達と話し合った後に記述させる
語彙が少ない子供	・ 手がかりになるような語彙カードをいつでも使えるようにする

これらの支援は、昨年度の実践に基づいて示したものであるが、これが全てではない。本年度もユニバーサルデザインの考えを生かした授業づくりを大切にしながら、個別の支援も充実させていく。また、子供一人一人の気質をうまく授業に取り入れてその子供が活躍できる授業にしていきたいと考える。

2 学習指導案及び授業討議の視点に加える

学習活動2

イメージが似た子供同士、違う子供同士等、自分が必要と思うイメージの友達とペアやグループになり、「僕のは空飛ぶ獅子だよ。粘土をつまみ出して立派なてがみをつくったよ」や、「このお化け屋敷は前にも後ろにも大きい穴があって洞窟みたいだね。中から角が出ていて怖そう」等、自分のイメージとその表し方の工夫を紹介し、友達の作品を見て面白いと感じた表し方について伝え合う。その際、子供たちは、自分と違う面白い表し方を見付けることで、それを自分の制作に生かしてより面白い作品にしようとする。【すごいところ

見付けタイム】教師は、作品をいろいろな向きから見よう促しながら、自分と違うイメージの子供とも交流できるように、誰とペアになるとよいかのアドバイスをする。また、教師が見付けた面白い表し方について話すことで、友達の新しい工夫に気付いたり、自分の工夫の面白さを再確認したりできるようにする。(図)すぐにペアになりにくい子供に声をかけ、ペアになったりグループに入れたりできるようにする。また、自分の考えを伝えることが不得手な子供には、話す観点を示しながら声をかけ、交流できるようにする)

学習活動3

交流で見付けた面白い形をつくる工夫を生かして製作する。製作の際には、ふだんの授業でしているように、必要に応じて自由に友達の作品や参考になる掲示物を見に行き行ってよいことを共通理解しておく。(図)表し方が考えられない子供に、形のつくり方の掲示物から工夫を選択できるように声をかける)子供たちは、製作に入ると自分の手元や作品の正面に意識が向きやすいので、教師は、作品を回したり自分の見る場所を変えたりして、どこから見ても自分のイメージが表せているかを確認するように、声かけをする。また、少し離れた場所から作品全体を見て、イメージに合うか確認し、形を付け足すか考えるように声をかける。

【進化の記録】

すごいところ見つけタイムで話すこと

【話す人】

- ①自分のイメージをつまえる。
- ②作りの工夫を伝える。

【聞く人】

- おい手の話を聞いたり、作りの見たりして、おもしろいと思つたことを伝える。

【交流の手順】

学習指導案(本時の教師の働きかけより一部抜粋)



授業討議「観点別に貼られた付箋ボード」より

3 研究発表会で発信する

(1) 特別支援教育支援員の研修として位置づける(綾川町教育委員会とのコラボ研修)。

24日(木) 提案授業Ⅰ

(実)…支援員 ママーズ…保護者ボランティア

国語科 1年
片岡 亜貴子
内田 珠世(支)

お話を音クイズで
お気に入りの場面を紹介しよう
～『おとうとねずみテロ』～

お気に入りの場面の様子から想像した顔表情や服装で表したお話を音クイズ。子供たちは、友達と対話をしながら音声を基に具体的に想像を広げ、クイズの言葉をよりよいものにしていきます。さらに、友達が作ったクイズの答えを見付けたいという思いから、他の様々な本にも興味をもち、読書の楽しさに気付いていきます。

生活科 2年
清城 智哉(T1)
遠田 朋子(T2)

幼稚園の友達と
おもちゃをつくって遊ぼう

4月から幼稚園の友達と交流を続けてきた子供たち。今回は、一緒に手作りおもちゃで楽しく遊ぶという目的意識をもって活動を行います。より楽しい遊び方について、友達と話し合う中で、これまでのおもちゃ作りや幼稚園の友達との交流での経験を生かしながら、遊びや遊びに使う物などを工夫していきます。

算数科 1年
好井 佑馬
教 祐司(支)

数あてクイズをつくろう
～大きいかず～

子供たちは、「10が2個と1が9個の数」といったクイズや「28-10-30」といった数の並びのきまりを基に数をあてるクイズなどを様々な活動を通して、数の多様な表し方を学んでいきます。どうしてその数が答えになるのかを友達と話し合うことで、数の見方を広げて、数についての感覚を豊かにしていきます。

図画科 2年
遠田 朋子
内田 珠世(支)

イメージを土粘土で表そう
～『おもしろい〇〇』をつくろう～

土粘土を使って、自分のイメージした面白い生き物を立体に表す題材です。粘土の感触を楽しみながら、握る・押す・ひねる等して形をつくり、自分のイメージに合うように、表していきます。友達と作品を見せ合い、感じたことを伝え合いながら、より面白く表すための工夫を見付け、自分の製作に生かしていきます。

<参加した支援員の方の声(一部)>

- 他の学校の授業を見る機会がほとんど無いので、とてもよかった。
- 支援員の声かけ、支援グッズ、目線、動き方がとても参考になった。早速取り入れたい。
- 見守るとき、支援するとき、そのタイミングが難しいと感じていたが、とても参考になった。
- 支援員の動線まで、考えた座席配置と担任教員とのコラボが参考になった。

<担当の指導主事の声>

- 実際のモデル授業を見ながらの支援員研修は、なかなか時間的にとれないのが現状。坂綾小研の午後の時間帯を活用できるのはありがたい。町内のすべての支援員が一緒に研修でき、とてもよかった。

(2) 特別支援の分科会を設ける

分科会講演(2日目) (12:30～13:30)



**国語科の
学習指導について**

京都女子大学発達教育学部
教育学科 教授
(前文部科学省教科調査官)

みと べ しゅう じ
水戸部 修治 先生

(主な著書)
『小学校国語科学習指導案パーフェクトガイド』
『小学校国語科授業&評価パーフェクトガイド』等



**「特別の教科 道徳」の
学習指導について**

香川大学教育学部
教職支援開発センター 教授
(元文部科学省教科調査官)

しちじょう まさのり
七條 正典 先生

(主な著書)
『道徳教育に求められるリーダーシップ』
『未来への扉を拓く道徳教育』等



**特別支援教育の視点を生かした
学習指導について**

香川大学教育学部
教授
香川大学バリアフリー支援室 室長

さかい さとし
坂井 聡 先生

(主な著書)
『自閉症スペクトラムなど発達障害がある人とのコミュニケーションのための10のコツ』等



**学習意欲と
その支援について**

香川大学教育学部
准教授

おかだ りょう
岡田 涼 先生

(主な著書)
『自ら学び考える子どもを育てる教育の方法と技術』
『ピア・ラーニング - 学び合いの心理学』等

<特別支援の分科会に参加した方(一部)>

- すごく参考になった。早い内に内容を整理して学校で伝達したい。
- 「OODA」その場で必要な対応をできるようにしていきたい。計画はしても現場にいる子供を大切にしたい。
- 「OODA」はすぐに実践、紹介したい。
- 特別な支援が必要な子供が何を思っているのか、きちんと分からないといけないと感じた。
- 例を挙げて分かりやすくたくさん取組を教えていただいたので試してみたい。
- 支援が必要な子についてきちんと話ができるようにという先生の言葉が心に残った。
- 特別支援教育についても常に意識を持っていたと思った。
- 通常学級での特別支援教育指導が必要だと感じた。
- 教師自身がメタ認知できているか、これから意識して子供たちと向き合いたい。

(3) 授業の指導者を一人は教科の指導者、もう一人は特別支援の指導者にする

年組	教科等	提案者	司会者	指導者	場所
1西	図工工作科	造田 朋子	多度津町立四箇小学校 教諭 小出 泰弘	西部教育事務所 香川大学教育学部 主任指導主事 准教授 宮脇美津子 小方 朋子	家庭科室
2西	体育科	山路 晃代	本校 養護教諭 河村 千種	県教委義務教育課 香川大学教育学部 主任指導主事 教授 長町 裕子 坂井 聡	5西

* 指導者の下段が香川大学特別支援コースの先生

○ 香川大学特別支援コースの先生の助言を受けながら実践したことを公開授業と提案資料で発信

4 特別支援教育の視点、支援員の動きについて（1年生時から継続しているもの含む）

(1) 図工の授業において

視覚的支援

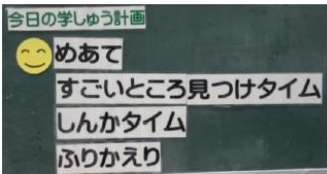
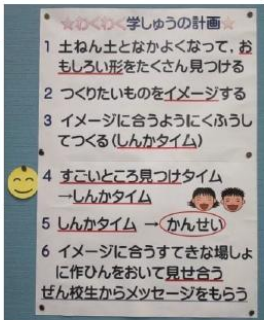
① 図工室へ移動する前の準備

授業に必要な持ち物を忘れたら教室にすぐには取りに戻れないため、図工室へ移動する際、黒板に服装と持ち物を簡単な絵や言葉で示し、自分で持ち物の確認ができるようにする。子供たちの中には、この絵の前まで行き、自分の袋の中身を確認している姿も見られる。



② 活動の見通しをもたせるために

題材の学習計画や今日の学習計画を明示する。顔のマークを活動の進行に合わせ、順に移動させることで、今している活動は何か、次は何をするのか明確に分かり、見通しをもって活動できる。

③ 活動の時間を知らせるために



製作の時間、交流の時間等、活動する時間の終わりが分かるようにするため、キッチンタイマーをテレビに写して使っている。そうすることで、後ろの席の子供でも、残り時間がどれくらいか分かり、見通しをもって活動できる。このキッチンタイマーは、5分、1分等区切りのよい時に短いアラーム音が鳴るため、その音でも子供たちは残りの活動時間を意識できる。終了の時間には長くアラームが鳴るので、子供たちは活動の終わりを知り、次の活動へと気持ちを切り替えやすい。キッチンタイマーのアラームに加えて、ハンドベルも用意しておく。タイマーのアラームが聞き取りにくい場合はベルを鳴らし、終了の合図をよりはっきりさせる。

④ 多様な表現ができるように

「何を想像したらいいのかわからない」「イメージはできてもどうやってつくったらいいのかわからない」という困り感をもつ子供がいる。想像や発想の幅を広げること、技能面において方法の幅を広げることが必要な支援となる。そこで、想像や発想の幅を広げるために、参考になる作例や写真等をたくさん用意し、その中から選んだり、組み合わせたりしながら、イメージできるようにする。また、技能面の幅を広げるために、いろいろな形とそのつくり方を掲示し、その中から選ぶことで、自分のイメージを表す方法が分かるようにする。

ただし、資料に準備した写真などの情報量が多すぎると、自分がし



「2年図工科」の提案資料より(一部抜粋)

< 参会者の声(一部) >

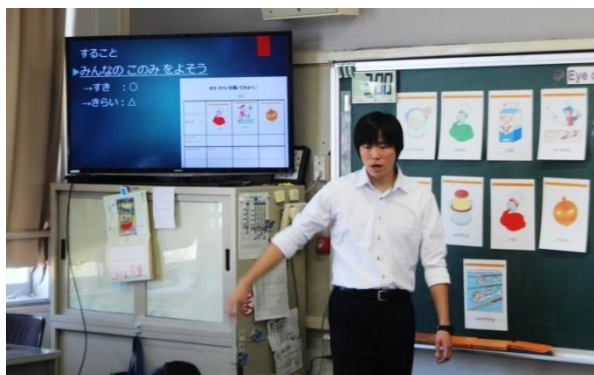
○ 本校も特別支援が必要な子供が多い。附小のメタ認知を取り入れた教育活動や特別支援の視点を参考にしたい。

○ 特別支援とメタ認知についてのつながりが分かった。できることを一つずつでもやってみたい。

○ 支援を必要とする児童についての関わり方、支援の方法も提案の中に取り入れられていて勉強になった。

4 日常の公開授業・討議及びワークショップで発信する。公立校のニーズを知る。

(1) 日常の公開授業・討議会の中で



することをモニターで明確化



大きな動作でモデルを示す



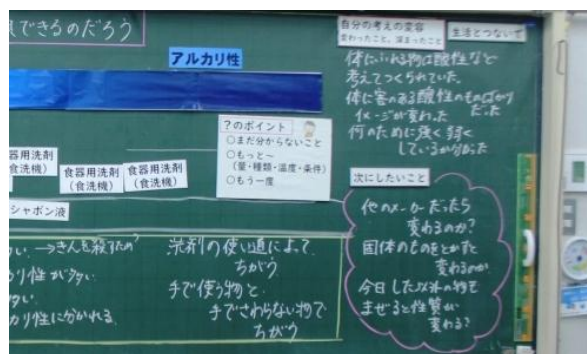
構造化されたサブ黒板を使っでの導入



心情円盤で自分を表出してからペア対話



電子黒板で製作過程を振り返って



振り返りの視点を明確にして



開発した実験装置を使って



グループ対話ボードを使って

(2) 坂井校長の360° カメラを用いたワークショップの事例紹介

令和元年8月1日、特別支援を専門とする坂井聡校長が360° カメラで撮影した附属教員の授業をもとに、通常学級での合理的配慮の在り方について研修を行うワークショップがスタートした。この研修は必要感のある多くの教員に参加してもらえるよう、勤務時間外に設定している。今回は夏休みの17:30～19:30の開催。約40名の熱心な教員や大学生、院生が参加した。

今回、素材として取り上げた授業は2年国語「お話の音クイズでお気に入りの場面を紹介しよう～『おとうとねずみチロ』～」授業者片岡亜貴子教諭と3年音楽「森の音楽をつくろう～『ピーターとおおかみ』～」授業者溝渕佳子教諭の2本。

国語では、子供が自分のお気に入りの本を夢中になって読んでいるところを再生しながら、友達や教師の話聞く時には机上に何も出さないようにして、話を聞くことに集中できる環境を整えるとよいことを映像の子供の様子から具体的に話した。

音楽では、教室環境を360度映すことで、集中しにくい子供のためにカーテンを閉めていることや、鑑賞曲の音量が気になる子供がイヤーマフをつけて聴いている様子等、困り感のある子供と環境の工夫を結び付けた支援のよさや、子供の発言内容が授業のねらいからずれていく場合があれば、一旦認めた上で、ねらいへ向かわせる助言をすることの大切さを話した。

また、モデルを示す際の基本的な留意点として①先行モデル(やってみせる)②同時モデル(一緒にやる)③身体的ガイダンス(必要なところを手助けする)を示し、具体的に参会者を相手にやりとりをしながら示した。

参会者からは、坂井校長や授業者の片岡教諭、溝渕教諭らに質問が相次ぎ、研修終了後も熱心に質問する姿が見られた。本校教諭にとっても、改革の柱の一つである「発達支援・ユニバーサルデザインの視点からの充実(通常学級での指導モデルの提供)」の大きな視座となっている。

360° カメラを使った特別支援教育の遠隔支援については、香川大学の宮崎英一教授と坂井校長と富士通の共同研究で「IAUD 国際デザイン賞2018教育部門金賞」を受賞しており(巻末資料参照)、技術面で香川大学技術科の宮崎教授よりサポートをいただいている。

今回も宮崎教授の技術的支援のもと、東北大学との遠隔研修も同時に行い、360° カメラに収めた本校の授業をもとに、坂井校長と授業者のやりとりや助言、フロアーからの質問・意見を皆で共有しながら研修が深められた。

この360° カメラを用いた研修のよさは、授業者も意識していなかった子供の表情やふるまいから、その背景と特別支援の視点からの助言を得ることができること、又、授業者が意図して行っている特別支援の視点からの取組を映像でクローズアップして効果を共有できることにある。45分の授業のうち、早送りや倍速機能を使い、ポイントになる場面のみをじっくり研修できるため、時間的にも研修の効率化が図れる。

今後も、附属の校内研究授業を360° カメラで撮り、このような研修を定期的に行っていく。



ワークショップの様子



東北大学とのやりとりの様子



技術的サポートをする宮崎教授(左端)



授業での工夫を説明する本校教員



坂井校長のアドバイスを共有する様子



参会者を相手にモデルの示し方の実演



質問する参会者



終了後にも多くの質問が



授業者にも多くの質問が



スタッフのおもてなし